

## コロナ禍に生まれた日本と中国、韓国の日本語教育の絆 —オンライン交流による国際交流プログラムの取り組み—



プログラム実施者：黄 明淑（東京福祉大学）

### 1. はじめに

このたびは、2021年度「日本語教育グローバル人材奨励プログラム」の研究助成金により、日中韓3カ国間の教育者による実践研究ができたことに、心より感謝を申し上げます。その成果の一部は2022年3月26日に行われた「世界中の日本語教育関係者のためのオンライン交流会」にて発題をし、本実践者が実践を進めていく過程で疑問に思っていた点や、本実践者とは相違なる見方について、質疑応答やディスカッションを通して、意見交換を行いました。また、共同発表を通して本研究に対する問題意識が明確になり、研究結果を踏まえた投稿論文を検討するいい機会になりました。さらに、今回の国際的な交流会では、日本や韓国、中国、ヨーロッパなど、世界中から集まった日本語教育のスペシャリスト、教育者（または実践者）や研究者らと最近の日本語教育の研究の動きや現状、研究方法、異なる視点および分析方法を踏まえて、深い議論を行うことができました。さらに、東アジアおよびアメリカ・ヨーロッパにおける日本語教育の方向、現状が把握できたと同時に、東アジアの日本語教育における国際交流の必要性や有効性について、その理論と実践方法を検討し、日本語教育に携わっている支援者・教師・研究者・学習者の中で活発な意見交換を行い、具体的な示唆を得ることができました。今回の交流会で得られた示唆をさらに発展させることによって、今後東アジア諸国およびアメリカ・ヨーロッパの日本語教育研究における新たな可能性が開かれ、新たなディシプリンが確立されることと考えております。

### 2. 本研究の位置付け

本研究の位置付けについて、まず2-1では研究の目的について述べ、次に2-2で本研究で明らかにしたい課題について述べます。

#### 2-1 本研究の目的

本研究は、グローバル化が加速し、多文化共生化が喫緊の課題となっている中、人的交流を主な目的とした国際交流プログラムが様々な形で行われ、その有効性と改善策が検討されてきました。コロナ禍のため、移動を伴う人的国際交流には厳しい制限が課せられ、国際交流の有り様を再定義・再検討しなければならない事態となったと感じます（赤崎、2021；関・大瀬、2021；吉田・清水・櫻井、2021など）。国際交流に関する先行研究には、学生視点での国際交流に焦点を当てた研究（森山、2019）や、教師の役割に焦点を当てた研究（森山、2020）などがあります。また、コロナ禍に孤立する留学生在が抱えた困難に着目した研究には高橋（2021）があります。高橋（2021）はコロナ禍の中、コロナ禍の中留学生在が抱えた困難について、留学生の講義、学生生活、感染への不安や感染予防、就職、人間関係、ストレスを含む精神状態、社会状況などについてインタビューのデータを用いて調査しました。分析の結果、コロナ禍の中留学生在が抱えた困難として、「講義・学習形態の変化」「就職や進路に対する不安」「コミュニケーション機会の不足」「国や家族との関係性」「日本に住むという不安」が、大カテゴリーとして抽出されました。本研究ではコロナ禍における国際交流研究の第一弾として、まず中国と日本、韓国のそれぞれの教育機関にて日本語教育

に携わっている日本語教員らが、コロナ禍でオンラインでの授業活動に携わりながら、抱えていた授業活動への困難<sup>(1)</sup>について教師の視点から半構造化インタビューを行い、個人の体験プロセスをボトムアップ式で明らかにすることを目的とします。分析においては、インタビューデータを、KJ法(上野、2018;川喜田、1967;1970)によってそれぞれの関連要因を抽出し、要因同士の関係を検討しながら、国際交流との関連要因を示す概念図を作成しました。

ここではまず、多田(2016)が提案した「共創型対話」を取り上げます。多田(2016)によると、「共創型対話」とはさまざまな英知を出し合い、新たな知を共に創ることを目的としており、「多様な人々が英知を出し合い、共に新たな知的世界に至ることを重視し、発展させる対話」と定義されています(多田、2016)。「共創型対話」について、多田は「価値観や文化的背景が違う人々と、心の襞までの共感や、完全な理解をすることは不可能である。しかし、互いに、英知を出し合い語り合えば、むしろ異質なものの出会いによってこそ新たな解決策や智恵が共創できる」と指摘しています。本研究ではコロナ禍の中、オンラインによる交流や対話を通して、日中韓3カ国間の教員らが、授業活動への不安や戸惑い、困難などの実態と、困難や不安を解消するための対話、授業に対する工夫点などについて、情報交換をしました。さらに、オンライン教育における互いの教育メソッドやノウハウなどの共有も行われました。それによって、コロナ禍における日中韓3カ国間の日本語教師同士でオンラインによる国際交流の新たな取り組みを試み、国境を越えた日本語教育関係者と共に対話による連携を図り、持続的な国際交流を模索することを目指しました。さらに、本研究はコロナ時代における国際協働ネットワークの強化や国際交流推進にも寄与できると考えられます。

## 2-2 本研究で明らかにしたい課題

本研究では、ウィズコロナ時代における日中韓3カ国間の教員たちが教育現場で抱えている問題に対する困難を、半構造化インタビューを用いて

分析することを通して、教員らの困難に対する認識(受け止め方)や、困難の実態を明らかにし、国際交流の必要性から連携の在り方を構築することを目的としたいと思います。具体的には、コロナ禍の中、日本、中国、韓国の3ヶ国間の教員たちが教育現場で抱えている困難に対する認識、困難の実態、教育現場で抱えている悩みや問題、不安などの共有により示された国際交流における連携の必要性について明らかにすることを研究課題にしました。

## 3. インタビューによる交流と対話

### 3-1 インタビューの対象者および実施場所

調査は2021年10月から2月にかけて、半構造化インタビューにより実施しました。インタビューの対象者は日本(主に東京)と韓国(ソウルと釜山)、中国の大学にて日本語教育に携わっている日本語教師計15名です。本調査はインタビュアーとインタビューイの1対1による半構造化インタビューにて行われました。インタビュアーは筆者本人です。筆者は2008年より日本語教師として日本語学校に勤務し始め、大学での非常勤講師歴が約6年間であるのと、専任講師を約4年間務めました。インタビューイは日本・中国・韓国の大学にて、日本語教育に携わっている日本語教育関係者がほとんどでした。できるだけデータを客観視するために、中国では北京、上海、広州など、日本語教育が盛んに行われている地域を広範囲で取り上げました。収集したデータについては、Zoomに付随している録画機能を用いて録音・録画したインタビューデータを再生し、音声ファイルを逐語レベルで文字化しました。中国では以下図1の都市を中心に、日本語教育の事情や教育現場での話を伺いました。

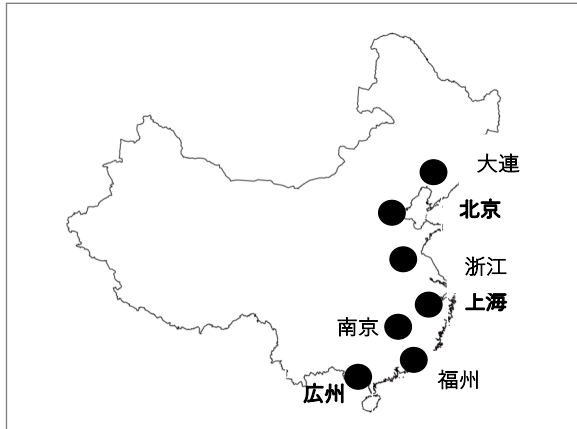


図1 インタビューを実施した中国の大学の地域と所在地

### 3-2 インタビューの内容

本研究で聞き取った具体的なインタビュー内容は、以下に示した通りです。

まず、インタビューの前半では、コロナ禍の中、オンライン教育において、教師たちが抱えていた困難について詳細に話を聞きました。

- 本コロナの前に、オンラインで教えた経験はありますか？
- 最初、急にオンライン教育にシフトになった際にどういう気持ちでしたか？
- オンライン授業で最も大変だったことは何ですか？

次に、オンライン教育における学習ツールやデジタルコンテンツ、大学のオンラインプラットフォームなどについて情報共有と情報交換をしました。

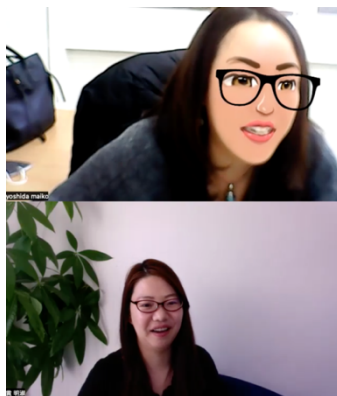


図2 オンライン教育における学習ツールやデジタル・コンテンツ<sup>(2)</sup>についての情報交換中

●従来の(対面授業の)教え方ではオンラインに通用すると思いますか？もし通用できるのであれば、具体的にどのように生かせると思われましたか？

●コロナ禍の対面授業・コロナ禍のオンライン授業とのことですが、コロナ禍だからこそ、特に意識して工夫された点があれば教えてください。

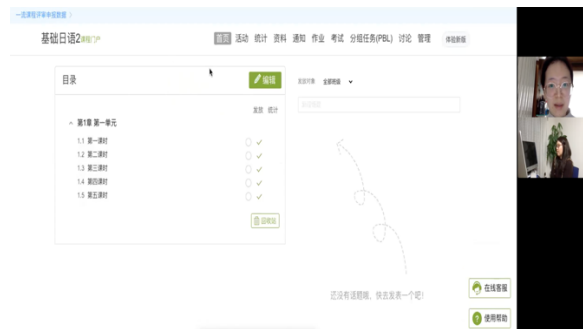


図3 北京の大学の教員と大学のオンラインプラットフォームについて情報交換中

さらに、教員が抱えている困難について聞き取った後は、日中韓3カ国間における国際交流の連携の必要性についてインタビューをし、情報交換をしました。

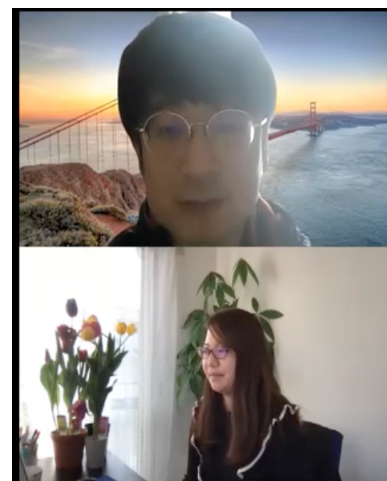


図4 日本語教育の未来について熱く語っている先輩と後輩

●日本、中国と韓国など、国際交流的な視点での教員同士の交流・連携はどのように思われますか？

か？つながりや連携の意義や重要性についてどのようにお考えですか。

●日本、中国と韓国など、国際交流的な視点での教員同士の交流・連携について、具体的にどのような形がいいか、何かお考えがあれば教えてくださいませんか。

●上記の考え/評価は、コロナ禍の前後で変化したのか、もしあればどのような変化であったのか、教えてくださいませんか。

コロナ禍に日本語教員が抱えた困難の実態を示すため、インタビューにおけるインタビュアーとインタビュー어의語りを以下に記します。なお、インタビュー어의語りについては「斜体」で、インタビューの時刻については[ ]で示します。

『教員にかかる負担』このカテゴリーは、コロナになり、初めて対面からオンライン授業に切り替えた当初の教員が抱えている心理的負担およびオンライン講義への困難の実態を表します。オンライン授業当初、教員Sは以下のように語られていました[1:04:52 S]

やっぱりオンラインのときにその反応がないのが結構きつかったんですね わかっているかどうかがこっちがよくわからないし、返事もあんまりしてくれないから、わかっているの↑シーンとなるとどうしようってなるので、すごくつらいついて感じになってドヨンってなるんですけど、ただ、学生たちにそれをちょっとね 返事がないとわかんないから、例えば私がね、読んで後についてときはそのときだけは、その必ずマイクONにしてって言って、私がどこまで読んでいる君たちがどこまでどのスピードで読んでるかかわかんないから次のが言い出せないでしょって言って、そこはやってくれなんてなってきたんですけど、なかなかやっぱり反応がすごく難しい見えないっていうのがあって、結構きついなっていうのがあります。わからないときに学生がわからないときにすぐわからないって言ってくれないから、その後は進めちゃったりするので、実はわかってなかったんだって後からわかったりとかするとち

よっとどうしようとか もうねもうここまで来ちゃったしみたになっちゃって。

[1:06:19] やっぱり反応がわからないわかりにくいかわかんないとかわかりにくいっていうのが一番きついなあと思っています』といった《学生の表情が見えないことから感じる授業活動へ心理的負担》という大変な思いを伝えて下さいました。

#### 4. まとめと今後の課題

以下では本研究について簡単なまとめを行います。本研究で日中韓の現場の教員らが感じた困難の実態についてKJ法によって調べた結果、大カテゴリーとして『教授法面の困難』『教員にかかる負担』『ハード面での困難』『改善案・代替案』などの要因が抽出されました。また、小カテゴリーとして、「教員の一方的な講義」「評価の難しさ」「オンデマンド式講義への対応の難しさ」「膨大な量の準備時間」などの要因が抽出されました。

国際交流の連携の必要性に関する要因としては、草の根のような「パートナーシップの構築」「偏見をなくした国際的な視野からの学び」「価値観や経験の共有による双方向的な学び」「学生交流による連携」「オンラインによる交流の多様化」などの要因が抽出されました。上記で導かれた困難に実態については、「道具的サポート」「情報的サポート」「情緒的サポート」の3つのソーシャル・サポートによる連携を通して、国際交流の連携の必要性を検証していきたいと考えます。

進捗状況および今後の予定について述べます。現在の進捗状況ですが、本研究を投稿論文としてまとめる作業を行っている段階です。また、今回の助成による成果は、今後の国際交流における共同研究の中核をなすものとして位置付けていく予定で、今後の共同研究の進展に向けて精進していく所存です。

#### 5. 本プログラムを通しての学びや気づき

実践者自身、日本、中国、韓国語の3カ国語が堪能なマルチリンガルとは言え、コロナ禍中、ZOOMの画面越しの交流にはさまざまな困難を感じましたし、企画の段階から色々な壁に

もぶつかりました。たとえば「報告・連絡・相談」や気遣いの文化の違いや、ZOOMなど交流のためのアプリケーションの使用の可否などが挙げられますが、出身校の先生や先輩方をはじめ、たくさんの方々と困難について話したり、アドバイスを求めたりなど、その都度その都度<対話による解決>を通して乗り越えることができました。Japanese standardが必ずしも他国の

standardとは言えないことを、本プログラムを通して気付かされましたし、文化の違いによるコミュニケーションのギャップや言葉の壁など、多少の違いや困難があっても、ホスト側（日本語教育という切口からすると日本）から相互理解の寛大さを示すことも、真の国際交流を目指す上では大切であることを学ばせていただきました。

## 注

- (1) 先行研究では 難しさ、不安、ストレス、大変さなど色々な用語が使われているが（布施、2015；高橋、2021など）、本研究では「困難」と統一します。
- (2) 図2は韓国で日本語教育に携わっているY先生によるSnap cameraのアプリケーションのご説明の場面です。Y先生はコロナ禍の中、GoogleスプレッドシートやJamboardなどのデジタル・コンテンツを積極的に授業に取り入れるなどして、オンライン教育に対して工夫を凝らしています。

## 謝辞

本プログラムの実施および報告書の作成に当たりまして、質問紙の作成や計画段階から大変お世話になりました出身校の恩師の方々や先輩方、後輩の皆さまに心より深くお礼申し上げます。また、研究上のご助言をいただきました出身校の先輩で駒沢女子大学の杉野知恵先生、調査の実施に当たり、多大なご協力をいただきました、東アジア日本語教育・日本文化研究会の理事である、復旦大学の趙彦志先生に厚くお礼申し上げます。調査実施に当たり、調査協力に快諾してくださいました出身校の先輩である高麗大学の白以然先生、北京大学の張晶先生、新羅大学の吉田麻衣子先生、浙江大学の胡文海先生に心より感謝申し上げます。さらに、本報告書の作成に当たりまして、示唆に富んだご指摘をくださいました日本語教育学会国際連携委員会の先生方に厚くお礼申し上げます。最後に、後輩で北京科技大学翻訳担当学外講師でもある馮立先生、中国側の研究全般のお手伝いをしてくださった後輩で広東外語外貿大学の経済学博士の全明先生に特別に感謝申し上げます。

## 参考文献

- (1) 赤崎美砂（2021）「オンライン授業の課題と可能性—異文化コミュニケーションの視点から—」『立教大学紀要異文化コミュニケーション論集』（169）,109-119.
- (2) 上野千鶴子（2018）「情報生産者になる」ちくま新書
- (3) 川喜田二郎（1967）『発想法』中央公論新社
- (4) 川喜田二郎（1970）「続・発想法」中央公論新社
- (5) 小玉安恵（2018）「オンラインによる異文化間協働型の日本文化の授業 COIL の試み—異文化間で活躍できる人材の育成をめざして—」『日本語教育』（169）,93-108.
- (6) 関昭典・大瀬朝楓（2021）「コロナ禍におけるオンライン国際学生交流プログラムの考察」『人文自然科学論集』（148）,113-146.
- (7) 高橋朋子（2021）「“オール近大” 新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」におけるアンケートならびにインタビュー調査の結果から—留学生が抱えた困難と課題—」『近畿大学教育論叢』33(1),173-195.
- (8) 多田孝志（2016）「グローバル化時代の対話型授業の研究」東信社
- (9) 布施悠子（2015）「母語話者日本語教師不安尺度の開発—新しい教材を教える場面に着目して—」『一橋大学国際教育センター紀要』（6）,121-136.
- (10) 森山新（2020）「問文化的シティズンシップ教育としての日本語教育—第10回日韓大学生国際交流セミナーでの韓国側学生の変容より—」『お茶の水女子大学人文科学研究』（16）,67-79.

- (11) 森山新 (2019) 「日韓の共生をめざす日韓大学生国際交流セミナーと教師の役割」 (15), 121-134.
- (12) 吉田知加・清水一彦・櫻井淳 (2021) 「国際協働によるオンライン ASEAN 研修実践—コロナ禍における国際交流に関する学修機会の確保にむけて—」 『情報教育シンポジウム論文集』 69-76.